

## 第51回 メラノーマの発生部位と挙動との関連性

### メラノーマの発生部位と挙動との関連性

はじめに

メラノーマが、発生部位によってその挙動に大きな差が出る腫瘍である事をご存知かと思われます。

「口腔内のメラノーマは悪性が多い」、「皮膚のメラノーマは良性が多い」、この辺りは比較的よく知られているメラノーマ発生部位と挙動の関係です。

では、実際にもう少し詳しいデータとしてどのような報告が為されているのでしょうか？

今回はイヌの皮膚、爪下、眼球、口腔内メラノーマのより詳細なデータを『Small Animal Clinical Oncology』から抜粋し、いくらかの修正を加えてご紹介したいと思います。

#### 1. 皮膚メラノーマ

皮膚のメラノサイトの腫瘍は、イヌの皮膚腫瘍のうちの5~7%を占めるとされています。

皮膚メラノーマは身体のあらゆる部位に発生します。

典型的な良性メラノーマは、肉眼的に濃く着色することが多く、境界明瞭で可動性があり、直径2cm未満とされています。

悪性の挙動を示すメラノーマは、急速に増大することが多く、直径2cmを越えることがあり、しばしば潰瘍形成を伴うとされています。

組織学的には、核分裂指数が挙動を予測する上で有用とされています。

核分裂像が強拡大像10視野の平均で0.3未満 (= 10視野合計3未満) のメラノーマは良性を示唆しています。ただし、核分裂指数が0.3未満であっても他の悪性所見が見られる場合はその限りではありません。

イヌにおいては、有毛部の皮膚に発生したメラノーマの85%以上は良性の挙動を取るとされています。

また、品種ではドーベルマン・ピンシャーやミニチュア・シュナウザーでは良性が多く、ミニチュア・プードルでは悪性が多いとの報告があります。

#### 2. 爪下メラノーマ

爪下メラノーマは、イヌの爪下腫瘍において扁平上皮癌の次に多い腫瘍です。

イヌではおよそ1/3~1/2の爪下メラノーマがリンパ節や肺への転移が認められると報告されています。

また、多くの場合は断指により局所コントロールは可能とされていますが、約半数は遠隔転移により死亡するとの記述もあります。

### 3．眼球メラノーマ

イヌの眼内に発生するメラノーマの大半は良性とされています  
虹彩もしくは毛様体から発生することがほとんどであり、脈絡膜での発生は稀です。

組織学的には皮膚メラノーマと同様、核分裂指数が良悪の指標として重要視されています。  
良性では核分裂像が10視野平均0.2未満、悪性では0.4以上とされています。ただし、核分裂指数のみでの判断は好ましくないように思われます。  
眼球の破壊自体は、良悪を判断する要素としては充分でないようです。

眼内メラノーマの全体的な転移率はおよそ4%と報告されています。  
良性のメラノーマの予後は良好であり、眼球摘出は治癒的な処置であるようです。  
また組織学的に悪性とされたメラノーマでは、25%が転移を起こしたとの報告があります。  
そして、その転移は一般的に眼球摘出から3ヶ月以内に起こるとされています。

### 4．口腔内メラノーマ

イヌの口腔内の悪性腫瘍で最も頻度が高いものがメラノーマです。  
口腔内に発生するメラノーマの多くは悪性に分類され、リンパ節や肺へ高頻度に転移を起こす悪性度の高い腫瘍です。  
その転移率は、部位や大きさ、進行度に依存しますが最大で80%と報告されています。

口腔内メラノーマの最も一般的な局所コントロール法は外科的切除であり、無処置に比べ有意に良い結果を示すようです。  
無処置の生存期間中央値が65日であるのに比べ、外科的切除単独での生存期間中央値は複数の研究で150～318日と報告されています。  
外科的切除での局所再発率は下顎骨切除で22%、上顎骨切除で48%であり、1年生存率は35%以下とされています。  
また放射線治療も有用なコントロール法であるようです。  
放射線治療を受けたイヌの生存期間中央値は211～363日、1年生存率は36～48%、2年生存率は21%との記述があります。

外科治療単独やその他の治療を併用した場合における有意な予後因子は、腫瘍のサイズ、臨床的ステージ、そして初回治療での局所コントロールの達成度とされています。  
WHOが規定している口腔腫瘍の臨床的なステージングシステム（TNM分類）は有意な予後指標になり得るようです。  
ある研究では腫瘍直径が2cm以上もしくはリンパ節転移があるイヌでは、生存期間中央値が164日であるのに比べ、直径2cm以下の腫瘍のイヌでは511日であると報告されています。  
また、再発した口腔メラノーマは未治療のものに比べて生存期間が有意に短いこと、吻側下顎に発生したものはその他の部位に比べて良好であることなどの報告もあります。

おわりに

今回はイヌのメラノーマについて、その挙動や予後に関わる要因を中心にまとめてみました。

上記のことから、臨床的には発生部位や腫瘍の大きさなどのステージング分類、組織的には核分裂指数が予後を計る上での重要となります。

パソラボ